

台湾人日本語学習者の文末における 「けど」「が」の習得についての一考察

陳 美玲

1. はじめに

話しことばの習得に関して多くの日本語学習者が困難と感じるものの一つは、最後まで言い切らずに後半を省略する表現である。文末の「けど」、「が」はまさにその代表だと言える。

実際に陳（1994）の修士論文では文末の「けど」「が」の習得に関して、中国語話者を対象に使用調査を行った。日本人、留学生（台湾人及び中国人の日本語学習者）、非留学生（台湾での留学経験のない日本語学習者）の三グループに分けて考察した。その結果、自然環境からのインプットの効果が認められるという結論に達している。ただし、学習歴の長短についての影響は考察していない。

本研究は陳（1994）が考察していない学習年数の長短と文末の「けど」、「が」の習得の関係を中心に見るのが目的である。「自然環境」という要因を除いて、台湾にいる日本語を専攻している学習者を調査対象とする。また、文末における「けど」「が」の談話機能の違いによって習得にどのように影響するかも考えたい。

2. 談話機能による文末の「けど」「が」の分類

分類は主に水谷（2001）、陳（1994）、佐藤（1993）を参考とした上で、次に示すように四つに分けた。

- | | |
|-----------------|---------------------|
| i 情況・話題・情報源の提示。 | アンケートの場面3、10 |
| ii 相手の反応を期待。 | アンケートの場面1、2、4、5、7、9 |
| iii 心的逆接。 | アンケートの場面8 |
| iv 発話の補強・修正。 | アンケートの場面6 |

3 アンケート調査概要

3.1 調査対象

対象者はすべて台湾で日本語を専攻している学習者(注1)である。学習歴によって、

二つの段階に大別する。学習歴2～4年の集団はAグループとし、学習歴5～7年の集団はBグループとする。対比して考察を行うため、日本人にも同様に調査を行う。

Aグループは5年制専科、和春技術学院という学校の学生である（日本の高専に相当する）。年齢は17～20歳である。人数の内訳は表1に示す。

表1 Aグループの学習歴別の人数

学校名 \ 学習歴	2～3年	3～4年	4～5年	合計
和春技術学院	56人 男14女42	70人 男17女53	68人 男22女46	194人 男53女141

Bグループは2年制技術学院の学生である（大学三年、四年に相当する）。上記Aグループのような学生が卒業したあと（5年間日本語学習済）、進学する学校である。以下の五つの学校からデータを収集した。年齢は20～25歳である。人数の内訳は表2に示す。

表2 Bグループの各校の人数

項目 \ 学校名	人数	男	女
南台科技大学	56	16	40
高雄第一科技大学	36	8	28
屏東商業技術学院	20	4	16
淡江大学	16	5	11
育達技術学院	9	4	5
合計	137	37	100

日本人は128人で、内男性26人、女性102人である。年齢は主に20代、30代中心であるが、40代～60代もいる。

3.2 調査期間

A、Bグループの場合は2001年5月から6月までの1ヵ月である。日本人の場合では54人は陳（1994）のデータを活用、74人は2001年6月から8月まで調査したものである。

3.3 方法

陳 (1994) の修士論文と同様の調査紙を用い (ページ 4 以下の参考資料を参照)、10 場面を設定し会話文を作り、答えを「けど」、「が」、「言い切り」、「よ」の四つの選択肢から選ばせるアンケート形式である。

4 考察

4.1 談話機能から見た日本人の選択

i 相手の反応を期待

「相手の反応を期待」と考えられる場面は十場面中、場面 1、2、4、5、7、9 の六つの場面である。場面 1、2、5、7 においては「けど」、「が」を六割以上が選択したが、相手への配慮の度合いの差によって「よ」を選択した人も三割近くいた。場面 4 は相手の行動を催促するというニュアンスがある。ほぼ全員近く「けど」、「が」を選んだ。場面 9 では「けど」、「が」の選択率は 53% しかなく、言いきりの選択率は各場面においても一番高く、34% である。これは「けど」、「が」の付加を用い、遠慮の態度を表す人とそうしない人の違いによる差異であろう。

ii 心的逆接

場面 8 は断りのニュアンスであり、かつ部下対課長という関係のため、くだけたニュアンスを持っている「けど」より待遇性の高い「が」を選んだものだと考えられる。この場面は全員「けど」か「が」を選択した。

iii 情況・話題・情報源の提示

場面 3、10 は情況の提示によって依頼する場面だと考えられる。二つの場面とも「けど」、「が」の選択率は高い。

iv 発話の補足・修正

場面 6 での「けど」、「が」の機能は相手の先行発話の補強だと考えられる。「けど」の選択率は「よ」とほぼ同じ四割強である。

4.2 日本語学習者と母語話者の比較

A グループを日本人と比べると、一番大きな違いは各場面において言いきりの選択率が高いことである。十場面を平均すると 35% の比率になっている。

「けど」+「が」の選択率が 30% 以上差のある場面は高い順から 4、7、8、3、9、1、5 の七つの場面である。(図 1 参照) 場面 3 と 8 では A グループの「けど」+「が」の

選択率は50%越えたが、日本人はほぼ100%近くの選択率になっているので、やはり差が出た。

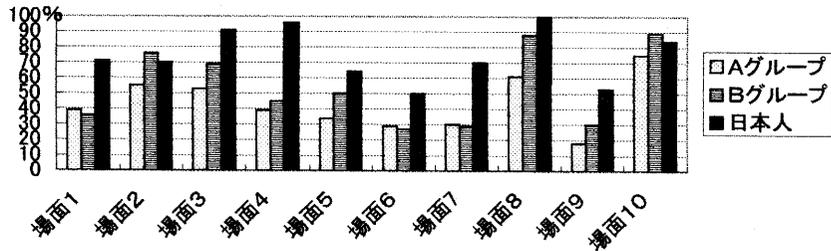


図1 各グループの場面別における「けど」+「が」の選択率

Bグループで「けど」+「が」の選択率が日本人と比べて30%以上開いている場面は場面4、7、1である。(図1参照)より日本人の選択率に近くなった。

4.3 学習者グループの比較

A、B二グループの共通点と相違点を以下にまとめる。

共通点としては日本人は発話場面、または上下、親疎関係を基準として「けど」か「が」を使い分けるが、A、Bグループには日本人のような「けど」、「が」の選択基準がはっきり見られない。

相違点としてはBグループは「けど」+「が」の選択率は全体的にAグループより日本人に近づいている。「言い切り」の選択率はAグループよりかなり少なくなった。

5 結果

- ①文末の「けど」「が」の習得について全体的にBグループは日本人に近づき、Aグループより進んでいることが観察できた。しかし、すべての場面において学習年数に対応して習得が進んでいるわけではない。
- ②学習年数の長いBグループでも定着しにくい機能は主相手の反応を期待する場面、及び発話に対する補強の場面である。定型的な形式のある依頼表現は早い時期に導入するためか、状況・話題の提示による依頼する場面3と場面10は学習年数の短いAグループでも比較的正しく用いることができる。

6 まとめ

文末の「けど」「が」のような文法のカテゴリを超えたことばの運用は、しばしば文脈や相手との関係など語用論的な配慮を理解することが前提となる。台湾での日本語学習者は教室外で実際に日本語を聞いたり話したりする機会が少ないという現状であるから、学習年数と習得度との間にバラつきがあることも肯ける。

しかし、依頼表現のような定型化になる文末の「けど」、「が」が定着しやすい事実鑑み、教科書の編集や指導などに工夫をこらすことで習得に反映させることも可能ではないかと今回の調査から示唆された。

注

1. Aグループでは41人、Bグループでは71人が観光などの目的で日本へ短期滞在に来たことがあるが、平均するとほとんど1ヶ月以内の滞在である。自然環境の影響を受けていないと考えられる。

参考文献

- (1) 内田安伊子 (2001) 「「けど」で終わる文についての一考察—談話機能の視点から—」『日本語教育』109号
- (2) 小出慶一 (1984) 「接続助詞ガの機能について」『アメリカ・カナダ11大学連合日本研究センター紀要』7号
- (3) 佐藤勢紀子 (1993) 「言いさし「…が/けど」の機能—ビデオ教材の分析を通じて—」『東北大学留学生センター紀要』第1号
- (4) 高橋太郎 (1993) 「省略によってできた述語形式」『日本語学』9月号
- (5) 陳美玲 (1994) 「話しことばにおける「けど」「が」の機能についての考察—中国語を母語とする学習者にとっての問題点を中心に—」お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士論文
- (6) 水谷信子(1985)『日英比較話しことばの文法』くろしお出版
- (7) —— (2001)『続日英比較 話しことばの文法』くろしお出版

(明海大学大学院応用言語学研究科)